

1 会津仏教

石田明夫

会津仏教の始まりと徳一

伝承の高寺山

『会津旧事雑考』や『新編会津風土記』に欽明元年(五四〇)「稻川莊(川の南にある莊園)高寺が建てられ、その跡は、宇内村の山上に有り。喜樂元年(欽明天皇時代)経蔵を納めたところを経塚という。高寺山に梁の青岩が小庵を結び、高山無山寺と称し、高寺ともいわれた。」とあります。見明門跡や寺屋敷という地名がありますが、当時の遺構は見つかっていません。日本に仏教が伝来したのは、五三八年とされていることからその真意は不明です。

徳一時代の陸奥国情勢

当時、陸奥国は、反乱が絶えず、宝龜七年(七六六)には、伊治皆麻呂の乱があり、征東軍大使藤原緒綱や藤原小黒麻呂を派遣しています。宝龜十一年(七八〇)『続日本記』に「陸奥国上治郡大領伊治皆麻呂が反乱し、伊治城の大領道嶋大楯を殺す。多賀城を襲い、府倉の物を取り、多賀城を焼く」とあり、国府も焼かれるほどでした。そのため、国府にいた藤原朝臣清足が、天応元年(七八二)『会津古墨記』によると滝沢村の堂家に流されたといえます。後に堂家は三家に分かれ、堂家は現妙国寺、石部が石部桜の地、大塚山(石堂)は藤原付近に館を構えています。延暦七年(七八七)には、鎮圧のため『続日

本記』、諸国の兵五万二千八百余人を多賀城に集まらせています。延暦十六年(七九七)『続日本記』に、征夷大將軍として坂上田村麻呂が胆沢の蝦夷を討ちます。延暦二十一年(八〇二)には、『類聚国史』坂上田村麻呂が胆沢城を築き、阿弓利為らが降伏し、ようやく鎮圧されます。その乱により、莫大な軍事費と人民が戦死し、平安京は財政的にも苦しくなったのです。そこで、延暦二十四年(八〇五)に、『続日本記』藤原緒綱が、陸奥国の軍事と国府造作止めるよう奏言したのです。そこで、藤原氏は、陸奥国平定のために、安全策として仏教での平定を目指し、派遣されたのが徳一となるわけです。また、同時に大同三年(八〇七)には、奏言した藤原緒綱が陸奥出羽按察使となり視察をしています。



柳津町の福満虚空蔵尊、菊光堂の南側には、只見川南西方向から撃たれた弾の跡が残されています。戊辰・会津戦争の時、対岸の小巻には、長州藩らが陣を敷いていました。堂は、会津戦争で銃撃されても寺の僧侶の努力もあり、焼けずに残った縁起の良い建物です。



虚空蔵堂の南側には、西軍が一定方向から撃ち込んだ弾丸の痕跡があります。



京都・清水寺



清水寺・阿豆流為の母禮(モレ)の碑



宮城県・多賀城跡



宮城県登米市柳津の虚空蔵尊
 柳津の堂は、宮城県登米市津山町柳津に柳津町から分けられた虚空蔵尊があります。弘仁九年(八一八)五月二日に建てられたとい、柳津と同じく丑、寅生れの一、生一代の守り本尊であり、境内には撫で牛や寅の像が置かれ、絵馬には鰻が描かれ、柳津ではうぐいでしたが、ここでは鰻が虚空蔵尊のお使いとされ、殺生しないことになっていきます。

当時の政府のねらいは、関東にいた中央政府に逆らっていた道忠らの独自宗教集団の封じ込めです。その中心人物は、唐招提寺鑑真の一番弟子の道忠で、関東に来ていました。道忠がいた栃木県下野市の下野薬師寺は、天平五年(七三三)には、奈良、九州の大宰府観音寺とともに日本三戒壇の一つが設けられた場所、東国仏教拠点でした。七七〇年には道鏡が左遷され、別当となっていました。そこに、戒律を授けた鑑真から律宗を学んだ如法僧都と道忠がこの寺に来て、中央の意に反し布教を進め、群馬県の緑野寺、栃木県の大慈寺などを建て、独自勢力を誇り菩薩戒を授けて回っています。道忠菩薩とも呼ばれ、その弟子円澄は、後に天台宗最澄の弟子となります。

そして徳一は、会津に勝常寺を建てるのです。会津に寺を建てる前に、徳一は、茨城県の筑波山中禅寺を延暦元年(七八二)に建て、いわき市の赤井嶽薬師を大同元年(八〇六)に建てています。会津では、湯川村の勝常寺を大同二年(八〇七)か弘仁元年(八一〇)に建て、奈良の虚空蔵菩薩を安置する比蘇寺と同じように、円蔵寺を弘仁三年(八一三)に建立し、やや遅れて磐梯町の慧日寺を弘仁五年(八一四)頃に建てたのです。

三一 権実論争の舞台



栃木県・下野薬師寺



茨城県・つくば山

勝常寺と藤原氏の荘園

会津盆地の中央に位置する勝常寺は、古代、蜷川荘とよばれた河沼郡にあります。蜷川荘は、近衛家の荘園として知られています。その中心に位置するのが勝常寺なのです。大同三年(八〇七)に、藤原一族の藤原緒継(おつぐ)が陸奥出羽の按察使(けびいし)となつたことから、そして任が終了するときに蜷川荘(伊南川庄・川の南の荘)を嵯峨天皇から貰つたと推定されます。そして、藤原氏の荘園として管理された可能性があり、その管理もかねて勝常寺が建てられたとみられます。荘園を管理していたところは「政所」と呼ばれ、会津坂下町にあります。十一世紀末には冷泉宮(三条皇女(依子)領となり、長治二年(一一〇五)には藤原忠実領、そして撰關家領の荘園となつていきます。



道鏡は、文武天皇4年(700)生まれ、奈良時代法相宗の僧。物部氏の一族弓削櫛麻呂の子。神護景雲3年(769)天皇位を得ようとした宇佐八幡宮神託事件で下野薬師寺に流され、宝龜3年(772)死去。

その道忠教団の北への勢力拡大を阻止するため、筑波山からいわき、会津に京都の藤原氏が徳一に命じ寺を建てさせたのです。道忠に近づいたのが、国費留学をした最澄で、

関東の道忠を訪ね親しい間柄となつていました。比叡山では、大同二年から弘仁九年(八一八)の間に『天台法華宗年得度学生名帳分』によると、比叡山に残つた者が十名、法相宗へ移つた者が八名いたという。その後、道忠の弟子で大慈寺を開いた広智の弟子円澄が天台二代座主(首席僧)となり、二代座主が円仁、四代座主は安恵、五代座主は円珍、六代座主は惟首、七代座主は猷憲と、関東出身者で占められていました。その時、日本仏教を大きく変えた大論争「三権実論争」が弘仁八年(八一七)に最澄と徳一間で始まります。

「一」とは最澄で、誰でも悟りは得られるとい考え
「三」とは徳一で、悟りまでには三段階があるとい考え

最澄は、徳一の論争には勝せず、勝つたのは、三代座主の慈覚大師円仁の時でした。

道忠の没年は不明ですが、大同三年(八〇八)頃とされています。徳一と最澄(天台宗)が論争していた時期は、道忠教団との対決でもあり、最澄は、弘仁八年(八一七)から九年、上野国の緑野寺や下野国の大慈寺を拠点に伝道を展開していたもので、三権実論争の舞台は、京都ではなく、関東と会津だったのです。

その中で、空海は、弘仁六年(八一五)弟子の康守を徳一派遣し、密教布教を依頼しますが、徳一は反対に「真言宗未決文」を回答しています。空海はその時「陸州徳一菩薩」と述べていますが、論争には、勝てないとみて積極的には

参加しませんでした。『高野雑筆集』。最澄は、弘仁十三年(八二二)に没。承和二年(八三二)には空海が没しています。

